子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2006年3月　NO.130

「in plant」 上田　奈保

〈もくじ〉

高知県経済の活性化に向けて…… 渋谷康一郎　2
音楽の癒しの効果…… 岸本寿男　3
公共文化施設は誰のものか…… 入交　啓　4～5
おいしいは楽しい…… 国光ゆかり　6～7
第20回記念現代書道研究蒼丘会書展を終えて…… 伊藤丘城　8～9
劇団33番地でございます…… 刈谷公治　10～11
機能展示…… 山本哲也　12
かるぽーと冬の事業のご報告…… 13
風俗歳時記・風伯…… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

高知県経済の活性化に向けて

渋谷康一郎

わが高知県の景気は、企業の生産活動が、県外取引ウエイトの高い先を中心に緩やかに持ち直しているとか、リストラの奏功による企業収益の回復を背景に、設備投資に踏み切る企業が増加しているとか、個人消費でも、婦人衣料や家電販売が増加しているとか、国内景気の着実な回復が、当地にも好影響を及ぼし始めており、徐々ながら明るい動きが拡がりつつあります。もっとも、高知県は、製造業の県内総生産に占めるウエイトが十パーセントと低く、政府サービス・建設業のウエイトが四分の一を占めるなど、公共支出への依存が強いという経済構造上の問題を抱えています。これが、景気回復への重い足枷となっており、全体としては、なお盛り上がりに欠く状況が続いていると言わざるを得ません。

では、一体どうしたら良いのか。こうした経済構造を変えていくには、やはり時間が掛かります。今こそ、それぞれの地域の住民が、暮らしに身近なところで、地道に活性化に向けた取り組みを行うことが重要です。

地域経済の活性化に当たって、「ビジョンの策定」「知の集積」「アクション」「ブランド化」といった四つのステップを踏む方法論が沖縄等で提唱されています。その第一ステップとなる「ビジョンの策定」について、少し具体的にお話ししますと、まず、①各地域の特性（強みや弱み）を分析するとともに、足許・将来の環境変化を整理します。次に、②地域特性の強みはさらに伸ばし、弱みは強みに変えるにはどうするか、克服すべき環境変化―公共支出依存体質からの脱却、少子・高齢化、地方の過疎化、若年層の高知離れへの対処など―をどう克服し、利用すべき環境変化―IT技術革新の進展、地球環境問題への対応意識の高まり、ゆとり・健康（安心・安全）志向の強まりなど―をどう利用するか、といった切り口で活性化の方向性を検討します。その上で、③地域の合意の下で、簡潔で大義名分のはっきりとしたビジョンを描きます。そうすると、これまで見えなかった視点や重点的に資源投入すべき分野がクリアになってきます。また、その過程で、産・学・官・民の「知」をできるだけ広く結集し、次の「知の集積」ステップ（ビジョンの実現に向け、有効な戦略をデザインし、アクションプログラムを具体化する）に繋げていくことが不可欠であると考えます。

個人的には、高知県では、地方の過疎化対策の重要性、さらには、全国的な知名度、「学」の強み等からみて、第一次産業の再編・活性化、一次産品の加工業の強化に重点的に取り組むべきであると考えます。また、経済的な波及度の大きさ、全国的な知名度からみて、観光の強化もやはり柱となりましょう。ただ、その場合、当地の地理的な位置から、「安・近・短」志向の観光客のみではなく、富裕層・長期滞在型の観光客誘致を狙うべきであると思います。今後大量に退職する団塊の世代をターゲットに、体験・参加、創造、教育を意識した観光を展開するのも一案です。

では、当面の対応策はないのか。キーワードは、「県外からの資金の移入促進」と「地産地消の徹底」です。この点、四月からスタートする「土佐二十四万石博」と、三月三日～十二日に開催される「土佐の『おきゃく』２００６」の両イベントは絶好のチャンスです。「二十四万石博」では、厳しい県財政の中、お金をかけて大河ドラマ館を建設するのですから、民間はもっと積極的に商売に徹したフェア等を企画・宣伝し、利用すべきです。また、「おきゃく」は、民間主導で観光客が少ない冬に高知の祭りを実現しよう、という画期的なもので、プレ二十四万石博の性格も持っています。来年以降もこの祭りが続くよう、もっと皆で盛り上げ、大いに「県外貨」を稼ぎましょう。

（しぶやこういちろう／日本銀行高知支店長）

音楽の癒しの効果

岸本寿男

最近、「癒しの音楽」という言葉を見聞きすることが多い。またよく「人の一生は音楽と共にある」とも言われる。音楽の好みは千差万別であり、どんな音楽を好むかには、その人が生きてきた歴史が反映される。従って音楽による癒しの効果を考える場合には、その人の人生における音楽との付き合いの深さや、音楽に対する感性の豊かさが、大きく関係する。

筆者は趣味として子供の頃から音楽に親しんでいるが、楽しいときや悲しいとき、いつもそこには音楽があり、それらによって慰められ、勇気付けられてきた。今も忙しさで、疲れきったとき、ほんのわずかな時間であっても、好きな音楽を聴き、楽器を演奏したりすることで心が安らぎ、リフレッシュされ、不思議と元気がわいてくる。まさに音楽は癒しと元気をもたらす魔法の栄養ドリンクである。

このような音楽の持つ心理的、生理的あるいは社会的効果を積極的に医療、福祉、教育に利用する「音楽療法」が最近、急速に注目され期待が高まっている。活用される対象と目的は非常に広い。実際に行われている頻度として最も多いのが、高齢者での認知症に対する進行予防や残存機能維持、心身活発化を目的に行われている集団音楽療法である。ほかには自閉症、心身症、行動障害、精神遅滞、統合失調症、うつ病などがある。また、言語、視覚、聴覚障害や肢体不自由児・者へのリハビリ。医療現場では心療内科でのメンタルヘルス、手術前後、歯科、産科での不安軽減、内視鏡検査や人工透析時の苦痛軽減、不眠症、血圧正常化、集中治療室における精神安定、ホスピスでのターミナルケアでの利用などがなされる。さらに健常人では健康維持管理にも用いられ、ストレスの緩和を目的としたリラクゼーション、感情のコントロール、メンタルヘルス・ケアなどがある。

わが国での実践や研究の歴史はまだ浅いが、実際に医療、福祉の現場で利用されつつある。二〇〇〇年に設立された日本音楽療法学会（http://www.jmta.jp/index.html）の活動も盛んで、六千人を超える会員を擁し、すでに約千人の音楽療法士の認定を行っており、急成長の状況にある。全国に支部組織があり、四国では高知に支部事務局がある。このように注目をされている反面、音楽療法についての基礎的な研究はまだまだ十分ではなく、また実践の場での人材も質的、量的に不足している。今後さらに専門性の向上を目指し、効果を科学的に検証する努力を積み重ねる必要がある。例えば最近、音楽療法の前後でNK細胞の活性などを調べて免疫力が増すことが科学的に証明されたとする報告も見られるが、今後はこのような基礎的な実証を進めながら、またこれらの方法論だけでは証明が困難な音楽心理療法的な臨床効果にも注目していくことが重要であろう。

筆者が全国の病院や施設で行っているコンサートや音楽活動は、音楽療法とは異なるが、吹き始めて三十八年になる尺八を主に使っている。尺八は倍音が豊富で歌声に近く、日本の曲からジャズまで広く演奏するのに適した楽器だと思っている。最近では、「医療における癒しの環境」という観点の必要性も指摘されるようになってきたが、医療施設での音楽活動はともすれば冷たくなりがちな医療現場の空気を和らげる効果があり、音楽療法導入へのきっかけにもなり得る。昨年の十一月四日に高知医療センターでの初めての院内コンサートの依頼があり、尺八とギターで一時間演奏させていただいた。二階までの吹き抜けのロビーに音がよく響き、おかげさまで好評であった。コンサートが患者さんのみならず、付き添いのご家族やさらに職員にも「音楽による癒し」の効果をもたらすことができたとしたら幸いである。定期的に開催を予定しているとのことで、今年もお声がかかればぜひ伺いたいと思っている。

（きしもととしお／国立感染症研究所室長・日本音楽療法学会理事）

公共文化施設は誰のものか

入交　啓

平成十五年の自治法改正で「指定管理者制度」が導入されて以後、これまでの牧歌的な地域の文化環境は一変しそうである。県・市は自ら抱える基幹文化施設の指定管理者に三年間はこれまでの財団（事業団）を指定することとしたが、県・市の財政状況がこの間劇的に好転することがあり得ないことを考えれば、期限後には民間事業者を参入させるべきだという圧力がより強まりそうだ。地域文化は誰が担い誰のためのものか、そのことを考えてみたい。

昨年暮れの高知新聞に「指定管理者制度」に関する特集記事が連載された。その中である識者が「どうして自治体は、人が入らない文化施設をつくったんでしょう、場当たり的な政策で、見極めが甘かったんじゃあないですか」と、施設をつくった自治体の政策選択の誤りを指摘していた。半分は正解で、半分は過疎地域を知らない人の外からのコメントだ。確かに人が入らない文化（というよりも観光）施設がバブル期を経て八十年代末から九十年代前半に雨後の筍のようにあっちこっちに出現した。だがこの頃、政府が国債を原資に野放図に補正予算を組んでは自治体へ垂れ流したことをご存知か。景気対策のためである。そんな時代、仕事もなく過疎と高齢化におびえる地域が、地域再生の最後のチャンスとして起こした事業を簡単に非難していいものだろうか。

人が「入らない」問題は、言い換えれば収支採算が合わないということだ。これを都市施設にしぼって考えてみよう。もし文化施設は収支採算が成り立つべきだ（逆にいえば成り立たない場合はダメだ）という前提に立てば、この国の地方の施設はほぼ壊滅してしまうだろう。もちろん無駄な施設をつくってはいけないが、無駄かどうかの検証はあくまで施設ごとに具体的に行うべきではあるまいか。分かりやすくするために美術館と図書館を取り上げてみたい。地方では美術館を独立採算に乗せるのは到底無理だから、美術館の教育的機能等をきちんと評価しなければ貧乏都市には美術館は不要と言うことになるだろう。図書館に至っては利用料は完全無料だから施設運営費全体が丸ごと赤字みたいなものだ。では存在自体が赤字の図書館の費用と効果をどう評価すればいいのだろうか。

つまり我々はこう思うべきなのだ。図書館や美術館などいくつかの文化施設は、その地域に住民が住んでいる限り、地域の文化を支える「基盤施設」として欠かせないものだ、という位置付けが必要なのだ。これを商業施設並みに採算を基準として語ること自体、地域の品格や文化などをどうでもいいと思っているからなのだ。これでは人々がわが地域や街への思いや誇りを持てるはずもなく、求心力も地に落としてしまうだろう。もちろん何が必要かは厳選するべきだ。ただ地方都市でも保健所や病院があるように、文化を底辺で支える基盤的施設を設置し維持する公共の責任を認め、その範囲はどこまでか、そういった議論にしなければならないのではないだろうか。

ところが政府の進める指定管理者制度はそういった考えは微塵もない。この制度は文化学術施設もその他の施設も何もかもひっくるめてビジネスの対象として新たなマーケットを拡げる試みなのだ。現に、財閥系シンクタンクなどは市場規模〇〇兆円などそろばん勘定などを行っている。結局、利用者を増やせ、経費は落とせ、という地方に過酷な課題を突きつけながら、根こそぎ民営化への誘導を図る算段なのだ。

こんな一方、大都市には公私立を含めて様々な文化施設がひしめいている。大都市の公立美術館も最近では採算をやかましく言いだしたが、利用者の立場からすれば、いつでも好きなジャンルの学術文化に触れる機会があることは、地方の住民にとってはうらやましい限りだ。この大都市と地方の文化格差自体も問題だが、これはここでは触れない。

さて、私たちがたまに上京し、印象派の巨匠展や〇〇名品展などといった高名なコレクション展へ行ったとしよう。そこには長蛇の列が続いており館内は地下鉄並みといったことがめずらしくない。人が来る美術館にするためにはこういった興行的に成り立つ企画展主体の運営にならざるを得ないわけだ。そんな人集めばかりの美術館にしてしまっていいのか、美術館がテーマパーク化してしまわないか心配するが、しかし、それでも大都市では収支を念頭に置いた運営が成り立つかもしれない。だが、地方の文化施設を年がら年中人で埋めるなどということは到底不可能だ。所詮、文化施設の民営化論、コスト論は大都市の論理であって、民力、財政力の低い地方が乗れる話ではないのだ。非力でも我々は自前で地域の文化を根づかせ育てていかなければならない。民間活力導入などというまやかしの論理に騙されてはならないのだ。

（いりまじりあきら／高知市民ギャラリーの会事務局長）

おいしいは楽しい

国光 ゆかり

新年、仲良しの晴代さんから「のり巻まきまきパーティ」に招待された。オーストラリアから本川中学にALTとしてやってきているジェームズが「海苔が好き」と聞いて、「バーチャル本川村（※1）」つながりの友人たちで「何か巻いたもの」を持ち寄ったホームパーティだった。今年の干支の「犬」を絵柄にした巻寿司をはじめ、見て楽しい創作的な巻寿司には歓声があがった。実は本番を前に練習もしたという熱の入れようだ。信田巻、酢漬け巻、ごぼうの牛肉巻、梅シソ巻フライなど、たくさんの「巻きもの」が集まった。

テーブルには卵焼き、かまぼこ、ほうれん草、刺身、うなぎ、漬物……様々な巻寿司の具材が並ぶ。そこで、男性たちが巻寿司にチャレンジした。静枝ママの指導つきだが、保育園の元園長先生だけあって、褒めながら教えるのがものすごくうまい。チャレンジャーたちの手つきは怪しかったが、切ってお皿に並べると、それなりの個性があって、「う～ん、舌を巻くおいしさ！」とオチも出た。

「翌朝、焼いて食べるのがおいしいよね～」とわたしが言うと、「何それ？」とみんなに返された。トースターなどで両面を焼くのだが、カリッとした食感とほわっと温かい酢めしはなんともいえない。「九州ではそうなの！」と開き直ったものの、「焼き巻寿司」が全国区でないことに驚いた。翌朝、試してもらったら、好評だったとのこと。ジェームズはマヨネーズをトッピングして食べたらしい。

ジェームズは、カナダ系のおばあちゃん伝来のタフィというお菓子を作ってきていた。ラッピングのリボンを「巻いた」と言う。二十三歳の青年がお菓子を手作りしてくれるなんて……「日本の男にはない気配りだよね～」と、女性たちは感動ものだった。

こうして、おいしく楽しく地域交流・国際交流ができるのも、〝食〟の力だと思う。

＊ ＊ ＊

去年、高知大学農学部からの仕事で、「環食同源」のパンフレットを制作した。「環食同源」とは、環境のことを考えた食料生産を行うこと、それがまた、循環型の環境をつくる上でも大切だという考え方である。かんきつ類の香りの追跡ができる、ストレスが甘いトマトをつくる……など、面白く有益な魅力が潜んでいて、シロウトながらわくわく感を抱く。

新しい概念のデビューをよりアピールするためにも、面白いパンフを作りたいと思った。そこで、コンセプトは「地球の処方箋」。――今、地球は、人間の寿命に置き換えるとだいたい中年期。成人病に脅かされる年齢である。病んだ地球に「環食同源」という処方箋を、とした。製薬業者から本物の薬袋を取り寄せ、パンフのパッケージにした。〝いつまでも　あるとおもうな　日々の糧〟というブラックな標語も添えた。「環境修復」「高付加価値化」「食育」という三つの柱は、処方された薬に見立てて解説した。

〝食育〟を積極的に実践しているという後免野田小学校の取材では、野菜や米を子どもたちが育て、食べるところまでやっていると話を聞いた。地元のおじいちゃんやおばあちゃんたちが農業の先生だったり、お隣の農業高校に子どもたちがアドバイスをもらいに行ったりしている。野菜嫌いだった子どもが、自分たちで作った野菜を「おいしい」と口にするようになったという。一番いいなと思ったのは、小学校をとりまくコミュニティができ、地域に子どもたちをいっしょに育てようという雰囲気が芽生えている、ということだ。

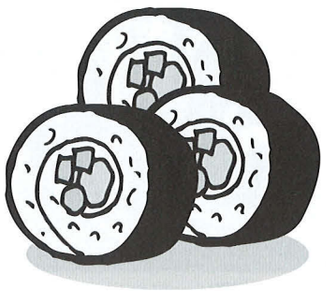
＊ ＊ ＊

今年から、教育の世界に「栄養教諭」という枠が新設される。「食育」をすすめる専門職だ。わたしは面接官として採用試験に居合わせたのだが、受験者は給食の現場で栄養士として働いている現役の方ばかり。わたしより年長の方もいて、教わることの多いチャンスを得た。

「子どもたちに食べることって楽しいことだと教えたい」――受験者の言葉だが、〈これって教えることなんだ〉と少し驚いた。確かに、わたしの給食の思い出はあまりよくない。今はかなりおいしい、と聞く。それでも、「食べることは楽しいこと」と教えなければいけない時代なのだ。そう言えば、大学生の〝コンビニのチビ食い〟は気になる。一日に何回も、おにぎりや菓子パンなどをチビチビ買い食いしている。食べることはエネルギー補給にすぎない感じだ。

幸い、わたしの周りは〝食いしんぼう〟がけっこういて、「鹿がとれたき山を降りゆう」と、その日の仕事を全部キャンセルしてやってくる友人もいる。それで、急きょ〝バンビの会〟と称した夕食会が開かれたりするわけだが、食べることでつながる友人は愉快な人ばかりだ。昨年末の「日経トレンディ」には、「バーチャル本川村」が〝ロハス（※2）〟として注目！と紹介されていた。本川で植えたじゃがいもを掘りたてで料理したり、鹿パーティやまきまきパーティをしたりするのが、実はものすごく豊かで贅沢な〝食〟の楽しみ方なのだろう。

（くにみつゆかり／南の風社編集長）



※1「バーチャル本川村」
本川村が好き、という人たちで組織する村外の人たちの本川村応援組織。現在、村民は千人を超す。地元の人から空き家を借りて、月一回泊まりで集まり、家の改修をしたり、村の行事のサポーターとして参加するなど、村民との交流をスローに進めている。

※2「ロハス」
健康で維持可能なライフスタイル、という意味で一九九八年アメリカの学者が提唱。

第20回記念 現代書道研究 蒼丘会書展を終えて

伊藤 丘城

「現代書道研究　蒼丘会」が結成されて昨年二十周年を迎えた。蒼丘会は、昭和六十年、当時私が指導していた高知市立中央公民館市民学校や高新文化教室の受講生などを中心に、さらに深い研究活動をしようという有志が集まり結成された。この日は高砂親方（元大関朝潮）が初優勝した日でもあり、蒼丘会も幸先のよいスタートを切ることができた。

現在の会員数は、三十七人である。私がこの会で大切にしていることは、一律な指導はせず、各人の個性を尊重し、創造性を重んじることである。会の規約には「古典を大切に勉強し、今日的自覚性ある書芸術の追及」と掲げた。

結成の翌年十二月に第一回目の展覧会を開催し、以来毎年回を重ね、昨年十二月十三日から十八日まで、高知県立美術館で二十回の節目となる記念展を開催した。次のステップのためにも、今一度今回の展覧会を振り返ってみたい。

演劇や音楽の公演等と書道の展覧会には共通点がある。会場設営、作品づくり、表装、各人やグループとしての研究、家族の協力、経費等々、たくさんの問題がある。第二十回展の主な問題の概要をまとめてみる。

1　会場づくり（作品陳列）

会場づくり、作品の配置は展覧会の成功か失敗かの要である。係の綿密な計画が成功し、大作五点、小字数二十四点、多字数二十四点、現代詩文書六点、篆刻二点など計百六点の展示を無事に終了した。中には県展特選二点、独立高知支部展特別賞一点も含まれており、どの作品も会員が精魂込めた力作ぞろいである。

2　オープニングセレモニー

初日九時半には約四十余人の参列があり、開幕の挨拶、祝辞、続いて入場と、セレモニーのおかげで会場はにぎわい盛況であった。

3　ご意見、ご感想箱から

初めての試みであったが、予想以上の投稿をいただいた。貴重なご意見、ご感想として深く受け止め、次への展開の資料としたい。臨場感を求めて、その中の一部を抜粋して紹介させていただく。

①　さすが二十回展にふさわしい展覧会です。成人式を迎えるとこんなにも成長されるものですね。入場した時、すばらしいと感じました。陳列の仕方も最高です。作品も魅力的で、会員の皆様さぞかし満足されていることでしょう。

②　個々の個性のある作品が多く、見せていただいてとても楽しく、また教えられました。会場の飾りつけも整然としていて、表具の色も良いと思いました。

③　大作も多く、大変すばらしく思いました。

④　さすが充実した作品、見事です。どの作も生きている。線がするどく深く温かく、また味わいあり、特徴の出た作品で会場が明るい。平素からの古典に立脚した線の追及が実ってきている。新作はやはりすがすがしい感じの中に光るものがある。最近、見たことのないすばらしい書展!!

会場風景

⑤　丘城先生を中心に皆さんが書の道を楽しんでおられることが身にしみ感激しました。特にこの珍しい程の大作力作の前に立った時の感動は余り経験したことのないものでした。

⑥　超大作・力作・数量・書展歴史、見る人を感動させます。目と心を洗われ、豊かになって会場を廻らせていただきました。

⑦　臨書作品、創作書その他多種にわたり会員が伸び伸びと発表していらっしゃることに力を感じました。若い会員の方々もたくさんで、これからの蒼丘会が楽しみです。

⑧　会場にあふれる情熱に圧倒され、勉強させていただきました。新聞記事の通りの姿勢で取り組まれておられることに感動いたしました。

⑨　線が太くて角はそれほどとがらず比較的素朴な筆運びで迫力を出すのが土佐風というところでしょうか。居酒屋さんの座敷にかけるとお酒がおいしく飲めそうですね。（ちょっと不謹慎?）全体的に高知風という感じがしますが…。いわば古今和歌集風とは対極でしょうか。

⑩　博象さんの超大作の臨書。力強く存在感あり、すばらしい。二十年の先生はじめメンバーの方々の努力がそれぞれ花開いたということでしょう。

左から二人目が筆者

ご意見、ご感想箱でいただいた⑨⑩について、少し私の考えを述べておこう。

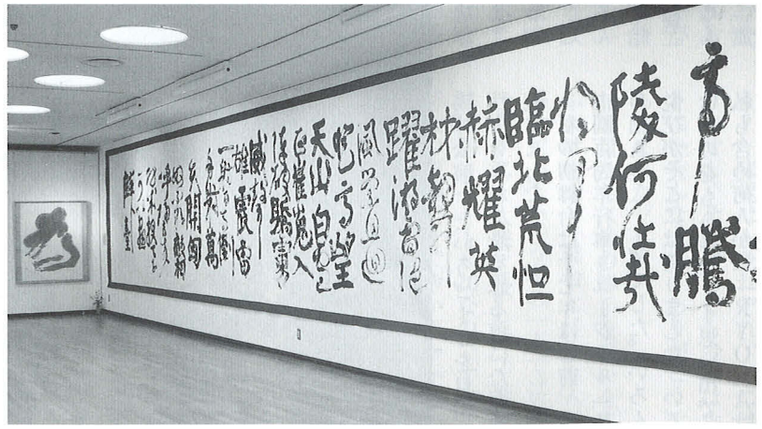
⑨は核心にふれた問題点である。「土佐風（高知風）、古今和歌集風とは対極」中々良いとらえ方である。県が買い上げた高野切を想起する。「土佐風」とは、「荒削りで自由な姿」を指すのだろうか。書道史に平安の三蹟の藤原佐理の離洛帖、三筆の空海の灌頂記が真率の書として高い評価を受けていることを思う時、土佐風（高知風）と評されたことをうれしく思う。

次に⑩についてである。澤田博象君の幅十六メートルの臨書の大作で、皆さんから「感動した」「圧倒される」「息をのむ」等々との感想をいただいた。紀貫之の高野切のような完成美（美の極地）ではないが、これも土佐風（荒削りで健康美に溢れ、真率の書）、大作ならではの美は備えていよう。大作は会場に変化、つまりドラマティックな世界をつくり出す。空間と全体構成を見据えた造形を腹に入れて貫通させている。澤田君の臨書作品の前半は旧作、後半は新作であるが、違和感はない。「存在感あり」と言われたが、このように考えてよいだろう。

今回の記念展は、来場者の方々に助けていただいた。開催期間中には、高知市で観測史上二位の積雪九センチという寒波に見舞われたが、四百十八人の方にご来場いただき、大変感謝している。

今後の蒼丘会については、これからも民主的に運営を行い、書芸術のさらなる追及に努めたいと思っている。

（いとうきゅうじょう／蒼丘会代表）



幅16mの臨書作品

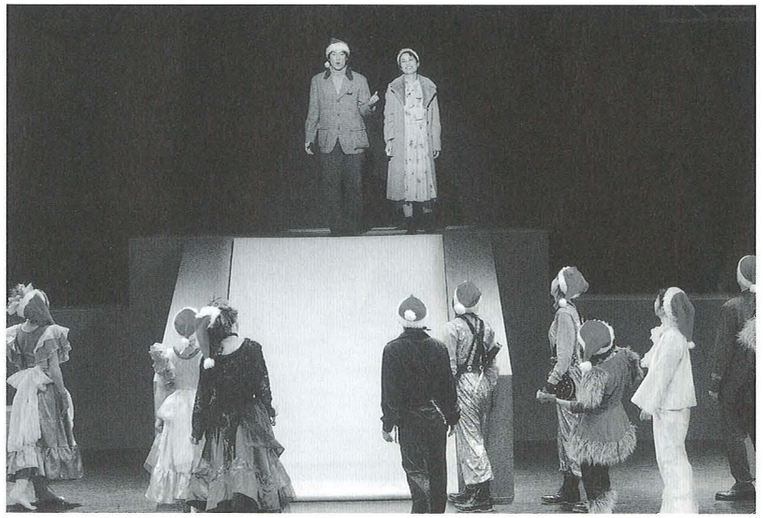
「劇団33番地でございます」

刈谷公治

『劇団33番地でございます！』と大声で名乗り始めて早一年、まさかこんな一年になろうとは。何もかもが予測の範囲外っていうか『劇団33番地』って誰？何者？モノ？物⁉……ご心配なくその名のとおり劇団です。それもなんとあろうことか、ミュージカル劇団です。「思いっきり県民エンターテイメント」と題し、公共の電波まで借り一般公募で団員を募り結成された、思い込みの激しい技術不足の表現したい集団です。「ミュージカルが好き」「まだ見ぬ自分に出会いたい」「う～ンやってみたい」など様々な思いを履歴書に書き集まってきた団員たち。歌・踊り・芝居どれかに経験を持つ者、まったくの初心者、高校生、サラリーマン、自営業、自由業、十六歳～五十うん歳まで、そんな多国籍な猛者たちが、昨年の十二月、県立美術館ホールにてミュージカルファンタジー「キミヲ∞マモル」旗揚げ公演をしてしまいました。（ひえ～！）

劇団名についてよく聞かれます。その由来がまさに、劇団立ち上げの感動の秘話であります。「作品を創りたい」という一人の思いから始まり、「出演者がいる」「制作プロデューサーがいる」「出演者は希望者を一般公募で集める」「地域づくりの活動家がプロデューサー」「劇団名どうする」「プロデューサーの名刺の中に地球33番地…33番地っていい感じ」「稽古場どうする」「地球33番地の蔵が借りられた」「人も集まった」「さあ劇団33番地だ」みたいな感じで劇団が誕生しました。必要は劇団の母となるわけです。誰かの強い思いと行動によりいろんなものが繋がって形を成す。あっという間のワラシベ長者でした。

私はこの「劇団33番地」の団員1号でもあり、劇団長の役を担っております。団員は私を「団長」と呼びます。「団長」ってあなたねェ、サーカスや応援団でもあるまいし、稽古場以外で大声で呼ばれると恥汗が出ますって。まぁそんなこんなでワラシベ劇団が立ち上がったわけですが、ここからが凄うございました。いろんな面で未熟な劇団、歩みは遅く不恰好。極寒酷暑レトロでグーな「蔵」の稽古場で、団員たちはいろんなものを流し、デロデロになりながら「旗揚げ公演」というゴールを目指し、稽古を重ね、恐る恐る前にただ進み続けました。



私の初舞台は十七年ほど前、高知市制百周年行事ミュージカル「RYOMA」。二十歳でした。いろんな悦びがそこにはありました。いろんなものをもらったイイ思い出です。私も含め何人かは「RYOMA」の残党と呼ばれ、高知の舞台業界に今だにハビコッテおります。「舞台に一回立ったら病みつきになる」とよく言われますが、病む？私はずいぶんと長患いです。この業界、狭い高知ではとにかく人手不足、特に男性。主体性が乏しく人当たりの良い男性の私は、あちらこちらにちらほらとお声をお掛けいただき、舞踊、芝居、ミュージカルといくつもの舞台公演に出演者、そして制作スタッフとして参加させていただきました。私が体験した舞台づくりとは、大きな荷物に「せーの！」で皆で手を掛け「どっこいしょ！」と持ち上げるような感じ？。手を掛けた瞬間から逃げ場のない状況に立ち向かい、フンバる者、サボる者、バランスを取る者、声を掛ける者、無言で頑張る者、助けてくれる者、とにかくその荷物を持ち上げるという同じ目的のために力を合わせ、直接言葉を交わしたこともない、顔や名前さえ知らないような人たちもが力を出し合い、それぞれの頑張りを見て、感じて、自らを奮い立たせ、青筋ムキっと「どりゃ～！」それを持ち上げた瞬間、自分の頑張りを誉め、他者に感謝する気持ちが湧き上がります。そしてそんな素敵な時間を共有してしまうと、親しくなくても仲間になれてしまいます。その荷物が重ければ重いほど。

舞台なんてものは、人間の生命維持のためには何ら必要がなく、人が「生きている」実感を味わうためだけの贅沢なもので、長年私も周りにずいぶんとご面倒をかけながら、贅沢三昧してきました。この贅沢を、おいしいと感じられる人たちに、素敵な苦労を伝えることができればと思い「劇団33番地」を始めたわけですよ。「言うは易く行うは難し」「やった者勝ち」旗揚げ公演を終えた今の正直な感想です。「やりたい！」と手を上げ、集まった劇団員。様々な理由で去った者。ほんとに大きな荷物を歯を食いしばって頑張り続け持ち上げた者。「どっこいしょ！」をおいしく味わえたのか？　どんな味だったんだろう？　味覚は人それぞれ、私には判りません。それにしても今回はホントにいろんな方に「ありがとう」でありました。

団員たちに私の勝手な思いをよくぶつけます。「舞台上に二十人居た場合、二十人のうちの一人では無く、一人が二十人居て欲しい」。数学的には20×1＝1×20なのですが、気持ちの問題です。幸か不幸か私の願いどおり？団員たちは自分主張のはっきりした素敵な自分大好き軍団。「歌えない、踊れない、芝居ができない」ありえない三重苦のミュージカル劇団であります。「足りない部分を何かで補い、おいしい瞬間を味わうため、素敵な苦労と戦う劇団33番地！」というスローガンを私が掲げたとしても、きっと誰一人聞く耳持たずマイペースなんだろうな～。すばらしい。

ずいぶんと長い間、皆様にいろんなものを私はいただきました。過ぎた日に「33番地の残党」と言われる奴らが、高知の舞台に地味～にハビコリ、次の誰かにおいしい味を伝えてあげてくれればイイなぁ～。

（かりやこうじ／劇団33番地劇団長）

学芸員シリーズ⑮

機能展示

山本哲也

高知県立埋蔵文化財センターでは、遺跡の発掘調査で得られた出土文化財を展示室において一般公開しています。展示品は近年の調査で出土した土器や石器・木製品や金属製品（鉄器・青銅器等）・石製品などで、いずれも発掘調査後の遺物整理作業において洗浄・注記・復元・実測の作業過程を経た現物であり、埋蔵文化財センターの業務と密接に関連した遺物が並べられています。

展示された遺物は、高知県の歴史を探るうえで貴重な資料ですが、美術品としての価値を有する優品ばかりを集めているわけではなく、当時の庶民層が使用していたごくありふれた器物が大半を占めています。

展示の内容としては、旧石器時代から近世までの資料を使用して高知県の歴史を通史的に紹介する「常設展」や、最近の発掘調査の成果を速報的に伝える「企画展」などのほか、昨年度から四国4県と松山市の埋蔵文化財センターが合同で企画した巡回展「発掘へんろ」が開催されています。

この巡回展「発掘へんろ」は、四国の最新の発掘調査の成果を4県で巡回展示するもので、県域を異にする埋蔵文化財センター間が合同で展示会を開催することは全国的にも初めてのことであり、地域からの情報発信の新たな試みとして注目されています。

また、広報普及事業として県下の小学校六年生を対象にした「出前考古学教室」やその他の学年を対象とした「歴史体験教室」など、専門職員が直接学校に出向いて授業を行う「出前授業」を実施しています。授業では、地域の歴史や遺跡の話、埋蔵文化財センターの仕事についての話と共に、出土品の展示や説明に加えて勾玉づくりや火起こしなどの体験学習が行われています。この出前授業では、土器などの遺物を直接観察したり体感することができ、作業体験を通じて古代人への思いを馳せるなど、新鮮な感動が味わえる授業として大変好評を得ています。

埋蔵文化財センターへの来館者は、平成十三年度からの展示施設の開設以来、年々増加しています。団体見学者等には、展示室の見学を始め、出土文化財の収蔵施設（収蔵庫）や遺物の整理作業風景なども見学していただいています。また、施設の一部を利用して、勾玉づくりや火起こしなどの体験学習も行われており、今後はさらに幅広い体験ができるよう考えています。この他、出土文化財の学校授業等への貸出も行われています。

高知県立埋蔵文化財センターは、他の展示施設とは違う特色を持っています。それは、センターの主たる業務である発掘調査事業と一体となって、整理作業室や収蔵庫、展示室などのそれぞれの機能を担う施設が埋蔵文化財センターの仕事のリアルタイムな展示をしているということです。つまり、施設全体で埋蔵文化財センターの仕事の機能を示す「機能展示」をしていると考えることができます。

そこに遺跡があることがなぜ分かったのか。発掘調査で何が判明したのか。発掘調査中にどんなことを考えたのか。など、調査員の「思考の過程」を盛り込んだ展示にも今後チャレンジしてみたいと考えておりますので、近くにお越しの際は是非お立ち寄りください。

（やまもとてつや／高知県立埋蔵文化財センター調査第一班長）

整理作業風景

高知市文化プラザ かるぽーと 冬の事業のご報告

◆高知市文化体験プログラム「神楽体験ワークショップ」

十二月十、十一日の両日、高知市文化体験プログラム「神楽体験ワークショップ」を小ホールで開催しました。

この事業には、県内の小学四年生から六年生までが参加し、高知県が誇る伝統文化を体験しました。

講師の津野山神楽保存会の方々は参加者に対し、踊りや演奏の指導と併せて、休憩中などの会話の中で、津野山神楽を引き継いでいくことの難しさや楽しさを伝えるなど、アットホームな雰囲気で、伝統芸能の素晴らしさを伝える事業となりました。

◆アーティストバンクプログラム vol.2「ライブ　パレット」

十二月二十五日、アーティストバンクプログラムvol.2「ライブ　パレット」を小ホールで開催しました。

この公演は、県内で活躍するアーティストたちを支援する「アーティストバンク」によるシリーズプログラムの第2弾です。

今回の出演者は、小松しのぶ、クレールサクソフォンクァルテット、混声合唱団バンジェの皆さんでした。

箏曲、三弦などの邦楽からサクソフォンの四重奏、ノリの良い合唱まで、バラエティに富んだステージで会場も大いに盛り上がりました。最後には和洋の楽器が合同で「きよしこの夜」を演奏。観客も出演者と一緒になって歌い、クリスマスの夜をお楽しみいただけました。

◆コンクール デ タブロー ～翔け　若き芸術家たち～

若手美術作家の育成・支援を目的に、本年度、美術作品コンクールを創設しました。第一回目にもかかわらず、県内外から三十六点の力作が寄せられ、一月十日～十五日の展示期間中に市民の皆様にご鑑賞いただき、大変好評でした。そして最終日十五日に高知県立美術館顧問の鍵岡正謹氏を審査員にお招きし、会場での公開審査という新しい試みを実施。当日は、作家、マスコミ、一般鑑賞者等七十人を超える人々が会場に集まり、一点一点作品の前で講評に耳を傾けました。

審査の結果、最優秀賞に上田奈保さんの「in plant」、優秀賞に島村悠さんの「意志」、上村卓大さんの「おかあさんのちょうこく」が選ばれました。最優秀賞の上田奈保さんは、副賞として、今年八月市民ギャラリーで企画展を開催します。

◆南河内万歳一座　大演劇訓練大会高知編「台本書こうぜ!!」

一月二十四日と二月九日の二日間、演劇ワークショップ、南河内万歳一座 大演劇訓練大会高知編「台本書こうぜ‼」を開催しました。

講師には南河内万歳一座代表の内藤裕敬さんを迎え、台本の基本的な書き方、発想方法などを楽しいお話で解説いただきました。

台本制作に特化したワークショップは初めての試みでしたが、多数の参加者を迎え、盛況のうちに終了しました。

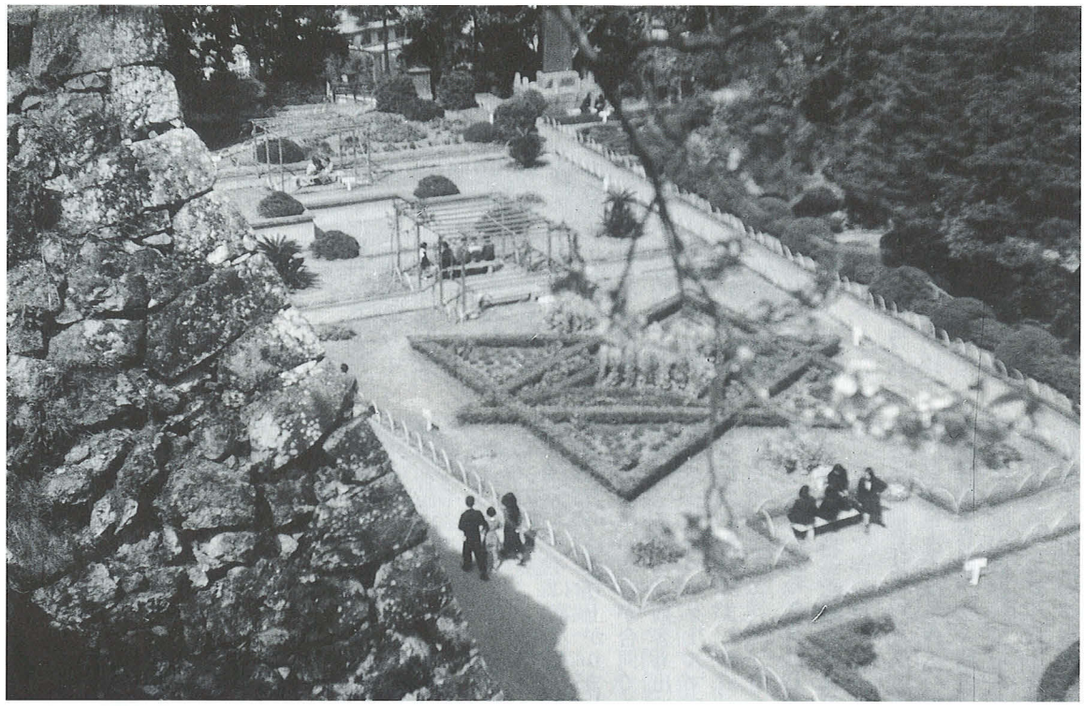
◆まんがの日記念 4コマまんが大賞作品展

十二月十七日～一月三十一日、横山隆一記念まんが館企画展示室で4コマまんが大賞作品展を開催しました。昨年創設し、海外を含め全国から六百四十二点の応募があった「まんがの日記念4コマまんが大賞」。その中から、入賞作品、一次審査通過作品、県内の応募作品合わせて百四十九点を展示。期間中親子連れなどたくさんの方が会場を訪れ、ユーモアあふれる作品の数々を熱心に見入っていました。

◆2005冬のまんが体験イベント まんがで遊ぼう！ クリスマスイブ

十二月二十三日、横山隆一記念まんが館まんがライブラリーで冬のまんが体験イベントを実施しました。「まんがクリスマスカードをかこう」「オリジナル缶バッジをつくろう」「まんがカレンダーをつくろう」の三つのコーナーが体験できるこのイベントは一昨年に続いて二回目。

参加した子どもたちは思い思いに仕上げた作品の出来栄えに満足そうでした。



高知を撮る
第21回写真コンテスト入賞作品

高知城下星の花壇

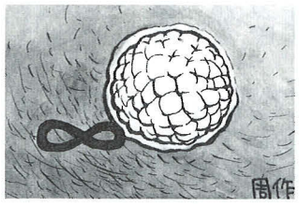
（昭和29年　高知城杉の段）

横川　宝喜

現在は桜が多く植えられて花見の時は宴会でいっぱいですが、この頃は星の花壇になっていました。

ES細胞

風俗歳時記



「ES細胞すべて捏造」本年一月十一日の各新聞一面トップの記事である。

Embryo（胚）とは、動物では、卵が発生して幼生（おたまじゃくしなど）や胎児になる迄の時期を指すことばである。

Stem cell（幹細胞）とは、いろいろの仕事をする細胞（血球細胞、肝臓細胞など）を生み出す、根源の細胞で、特に初期胚から分離された胚性幹細胞（ES細胞）はあらゆる細胞に変身できるので、万能細胞とも呼ばれている。

ES細胞の核を難病の患者の核と置換できれば、患者の情報を持つ（移植で拒絶反応が起きない）万能細胞ができ、さまざまな臓器の再生が可能になる。この意味で、患者の核を持つES細胞は「再生医療」の希望の星と言える。それだけに今回のニュースは残念である。

学問の世界にも、古来偽物は珍しくない。有名なのは、昔イギリスで見つかり、現生人類の祖先と思われたピルトダウン人の頭蓋骨である。この骨の研究で学位を貰った学者もいたようだが、やがて、オランウータンの骨などから「合成」されたものと分かった。

我が国でも「神の手」を持つ人が「発見」した縄文遺跡の話題は記憶に新しい。

これらの偽物騒ぎは研究者の功名心が生み出したものと言えそうだが、今回の韓国の事件の背後にはもっと深刻な事情が隠されている。

研究者から研究成果を「名誉」や「研究費」で買い、一定期間に「成果」の出ない研究には金を出し渋る国の政策である。

これは韓国だけの風潮ではない。今、我が国の教育や研究の世界で推し進められている「改革」の実態でもある。

研究者は誰でも研究費が欲しい。成果が出ないと研究費が削られるとなると、なり振り構わず成果を「造り」たくなる者も現れるだろう。

およそ教育や研究の世界には「経済万能主義」は馴染まない。むしろ、ゆったりとした研究環境を作ることが政治に要求されている。

どうも、「改革」が必要なのは「構造改革」を叫ぶ人の頭脳であるらしい。

（路）

高知遺産

The Kochi Heritage 2006

生まれて20年目の中央公園

特になにをするでもなく遠くから聞こえる琴の音をぼんやりと聴くお爺さんやお婆さんの姿が、実はこの公園にはよく似合う。この公園も改築されて20年。もう少し一時的な「イベント広場」としてだけ使うのではなく、日々野外映画や野外ギャラリーの開かれるような、まちの顔としての公園になってくれたらと思う。（竹村直也）

風伯

新聞を読む

毎朝の日課は新聞に目を通すことだ。中央紙、地方紙、それだけでも結構時間が掛かる。新聞一部を隅から隅まで読んでいたら文庫本一冊の活字量になるそうだが、退職老人に許された贅沢な時間として受け止めている。

それにしても、増ページ競争で肥大化した紙面は、丁寧に読むにはうんざりのページが多過ぎる。広告はまだしも情報として許容できるが、政治から運勢占いまで包含した編集は、余りにも万人向けで特色が無い。少なくとも株式市況の一覧表が、まったく不必要な層も存在するのだ。もうそろそろ、この新聞の売りは何か、芸能、スポーツか、文芸か、家庭欄か、各社の本命を発揮してもらいたい。

政治向きについても、新聞が厳正中立であるのは神話であった。と言える成熟した時代の今、各社のカラーをもっと鮮明にすべきだろう。最初から立場のはっきりしている各政党紙の方が、正直で信用できる事例が多い。

ただでさえ活字離れの言われる時代である。このまま行くと、テレビ欄を見れば、後は無縁なページが多いような、人畜無害の紙面作りでは、購読料の支払いにも疑問を抱き始めるだろう。当方は何十年来の習慣で親しんでいるのだが、視力も弱ってきたので、無関係なページに出合うと、ある種ホットする。そのうちに、そんな御しやすい老人ばかりではなくなると思うのだが…。（3）

第22回写真コンテスト

高知を撮る 入選作品展

高知の懐かしい風景や出来事、人々の暮らしを記録した写真や、撮影者の好きな高知を表現した写真など、コンテストの入選作品70点を展示します。

会期：3月14日㈫～3月19日㈰
時間：午前10時～午後5時
場所：高知市文化プラザかるぽーと
　　7階市民ギャラリー第4展示室
※入場無料
主催：㈶高知市文化振興事業団
　　〒780－8529 高知市九反田2－1
　　電話088－883－5071
協賛：富士フイルムイメージング株式会社
後援：株式会社ラボネットワーク
　　高知県カメラ商組合

第21回写真コンテスト
「I LOVE 高知部門」準特選　「陽春」貞岡喜朗

今号の表紙

第1回　Concours des Tableaux 最優秀作品
「in plant」　上田奈保

この絵の仕事には少し未練が残る。白いキャンバスは恐くない。たっぷり作った青や赤の絵具で画面を区切ったり、塗ったり、線を描くのが好き。そういえばこの絵は途中がよかった。中央部に赤を置いていて、その赤の飛び散り具合が今思えば最高。そのままにして置けず描き進め、その痕跡は残ってはいないがそれでも二度と描けないひとつの風景となりました。まだまだです。
（うえたなほ／土佐中学・高等学校講師）

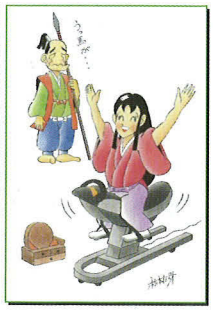
文化高知 No.130 2006年(平成18年)3月1日発行 [隔月発行]

まんが・漫画・マンガ展！2006

高知漫画集団・高知漫画グループくじらの会 合同原画展

入場無料

920「ボビーマジック ーコンナニ・ナッチャッタケド 頭ノ中二世界一ガマダアリマスカラー」(高知漫画集団)



杉本カズオ「へそくりで、買っちゃった」(高知漫画グループくじらの会)

期間 2006年 3月4日(土)～3月31日(金)

場所 横山隆一記念まんが館 企画展示室

- 時間／9:00～19:00
- 休館日／月曜日

◆地元高知に根付いた活動を行っている二つのまんがグループ「高知漫画集団」と「高知漫画グループくじらの会」の合同原画展を開催します。それぞれ、土佐にちなんだテーマの作品競作、そして、作家の作品世界を堪能できる自由作品などを展示します。

似顔絵コーナー 10:00～16:00

(高知漫画集団)
3月4日(土)、5日(日)、11日(土)、12日(日)、25日(土)、26日(日)

(高知漫画グループくじらの会)
3月18日(土)、19日(日)
場　所：まんが館企画展示室入口
参加費：色紙代100円＋チャリティー

まんが教室 13:30～15:00

(高知漫画グループくじらの会)
3月18日(土)、19日(日)
場　所：まんがライブラリー
参加費：300円(要申込)

主　催／(財)高知市文化振興事業団 横山隆一記念まんが館　共　催／高知漫画集団・高知漫画グループくじらの会

お問い合わせ先／〒780-8529 高知市九反田2-1高知市文化プラザかるぽーと内 横山隆一記念まんが館 TEL：088-883-5029 FAX：088-883-5049 URL：http://www.bunkaplaza.or.jp/mangakan/

アーティストバンクプログラム vol.3

Live Palette

濱田洋一・あかり／フラメンコ

林達也／ファンクダンス

プアナニアロハ・マカヒヌ・ヨシ子中村とフラの仲間たち／フラダンス

県内で活躍するアーティストたちを支援する「アーティストバンク」によるシリーズプログラム第3弾。
ダンスと歌をテーマにした3組によるステージをお楽しみください。

小ホール　3月9日(木)　18:30開場 19:00開演　全席自由1,500円　お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071

日本を代表する金管楽器プレイヤーが“かるぽーと”に集結！
5団体の共演により実現する“夢のスーパーブラス”
「ザ・ブラスファクトリー」旗揚げ公演！文化の港“かるぽーと”を初ステージに新たな船出！

ブラスの祭典 THE BRASS FACTORY

3月26日(日)

13:00開場　13:30開演

大ホール

料金(一部指定)

■指定席(2階1列～6列,第1BL)
前売り3,500円(当日3,800円)
■自由席(1階,2階7列～10列,第2.3.4BL)
一般：前売り2,800円(当日3,000円)
学生：前売り1,800円(当日2,000円)

お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)／郵便振替01680-5-14869